

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：43807

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530804

研究課題名(和文)介護老人福祉施設における終末ケア全国実態調査研究

研究課題名(英文) National Survey of Actual Conditions on End-Stage Care at Long-Term Care Health Facilities for the Elderly

研究代表者

佐々木 隆志 (SASAKI, TAKASHI)

静岡県立大学短期大学部・その他部局等・教授

研究者番号：50178654

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、介護老人福祉施設700か所を対象にして、終末の看取りに関する調査を行った。調査項目は、死亡場所、家族の看取り状況、死因、死亡時期、死亡前の家族との連絡及び死亡後等である。1. 死亡場所では施設内死亡54%、入院先の死亡44.1%、在宅に戻り死亡0.3%であった。2. 死亡者で家族が立ち会ったケースは29.7%であった。3. 死亡前家族が施設を訪問したケースでは平均9.17件(84.1%)が「ある」と答えている。4. 死亡時期の平均では、「3月」が1.50名と最も多かった。次いで「6月」1.28名となっている。5. 死因では、「老衰」942名、「肺疾患」390名の順となっている。

研究成果の概要(英文)：In this research, surveys on end-stage care, particularly regarding whether family members were with the residents of the care facilities at the time of their deaths, were conducted at 700 long-term care health facilities for the elderly nationwide. The items surveyed were as follows: place of death; family's presence or absence at the time of death; cause of death; time of death; and facility communication with the family before and after death. 1. Breakdown of the place of death: among all care recipients, 54 percent died in care facilities; 44.1 percent died at hospitals; and 0.3 percent died in their own homes after returning there. 2. Whether family members were with the care recipient at the care facility at the time of death: 29.7 percent had family members present. 3. Whether family members visited the care recipient in the care facility before death: 9.17 families on average at each facility, which accounted for 84.1 percent, replied "yes."

研究分野：高齢者福祉

キーワード：終末ケア ターミナルケア 特別養護老人ホーム 看取り 処遇改善

1. 研究開始当初の背景

(1) 筆者は、1990年以降東北地方の特別養護老人ホームの終末ケア研究をすすめてきた。その際、終末ケアの理論をEK、ロスやC、シシリーに依拠し、実践体制をセントクリストファー・ホスピス(イギリス)を中心に、特別養護老人ホームにおける終末ケアの有効性を検討してきた。(1)

(2) その後、1999年国際高齢者年には、日本における高齢者福祉及び終末ケアに関する国外からの問い合わせ及びニーズに対応し、科研により終末ケアに関する英文論文を刊行し、アメリカ及びイギリスの研究協力を得た機関や施設に謹呈し、日本の現状をアジア、ヨーロッパ及びアメリカ方面に発信してきた。(2)

(3) 日本における高齢者福祉の仕組みは、2000年介護保険施行により、従来の措置制度から契約制度へと、サービスの仕組みは大きく変わった。そこで介護保険下では、イギリスやドイツを部分的にモデルにしたケアマネジメント手法が日本でも採用された。

そこで筆者は、終末ケアの仕組みをケアマネジメントと連動させ研究を進展させ、「日本における終末ケアマネジメントの研究」を著した。(3)

(4) 2014年2月には、終末ケアマネジメントを海外に発信した。(4)

以上のように筆者の終末ケア研究は、発展させてきた。そこで、2011年度以降では、高齢者福祉関係法の改正もみられ、新たに社会福祉サービス下における、特別養護老人ホームの終末ケア実態調査の必然性が生じた。

2. 研究の目的

本研究は、2011年から2014年の4年間で終末ケアの先行研究を明らかにし、全国の特別養護老人ホームの利用者が、いつ、どこで、誰に看取られながら、終末を迎えたか(死亡場所)及び、終末後の施設の対応などについても明らかにする。

3. 研究の方法

全国老人福祉施設協会に登録された、特別養護老人ホームのなかから、北海道、東北、関東方面の施設700ヶ所を抽出し、郵送によるアンケート調査を実施した。

4. 研究成果

調査対象：全国の特別養護老人ホーム
700ヶ所
回収数：197票
回収率：28%

(1) 入所定員

特別養護老人ホームの入所定員は、「51～100名」が53.3%と最も多く、次いで「50名以下」が37.1%、「101～150名」が8.1%などとなっている。

(2) 死亡者

死亡者では、「平成25年4月1日から平成26年3月31日までの1年間で入居者で亡くなられた方はいますか。(急変して入院先での死亡も含む)」の間では、死亡者は、「いる」が95.9%、「いない」が3.0%となっている。「1.いる」と回答した方に、死亡場所と人数では、次のようになる

(3) 死亡場所

亡くなられた方の死亡場所と、人数は以下の通りである。

	施設内	入院先病院	在宅に帰り	その他	死亡者合計
総数	1,333名	1,089名	8名	38名	2,468名
平均	8.33名	6.08名	0.14名	0.68名	

死亡場所は、「施設内」が54.0%、「入院先病院」が44.1%、「在宅に帰り」が0.3%、「その他」が1.5%となっている。

(4) 家族の看取り状況

亡くなられた方の介護状況看取りについては「家族の方が、死亡時に立ち合って亡くなられた方は何名でしたか」では、次の通りである。

	家族が立ち合った	死亡者合計(再掲)
総数	732名	2,468名
平均	4.33名	

家族の看取り状況は、死亡者合計に対し、「家族が立ち合った」が29.7%となっている。

(5) 家族等が訪問したケース

死亡時は立ち合っていないなくても、「亡くなる前に、ご家族等が施設を訪ねたケースはありましたか」の間では、家族等が訪問したケースは、「ある」が84.1%、「ない」が7.4%となっている。また、「ある」場合の件数の平均は、9.17件となっている。

(6) 死因

亡くなられた方の死因についての病名と死亡者数では、以下の通りである。

死因	死亡者数
・老衰	942名
・肺疾患	390名
・心臓疾患	257名
・脳疾患	95名
・呼吸器疾患	64名
・癌	57名
・上記以外	106名
合計	1,911名

死因は、「老衰」が942名と最も多く、次い

で「肺疾患」が 390 名、「心臓疾患」が 257 名などとなっている。

(7) 死亡時期

亡くなられた方の死亡時期(月)については、以下の通りである。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月
平均	1.34	1.30	1.28	1.44	1.36	1.44
	名	名	名	名	名	名

	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平均	1.42	1.34	1.43	1.42	1.42	1.50
	名	名	名	名	名	名

死亡時期の平均は、「3月」が 1.50 名と最も多く、「6月」が 1.28 名と最も少なくなっている。

(8) 死亡前の話し合い状況

亡くなられた方について「死亡前、家族の方々と亡くなる場所などについて話し合いが持たれましたか」では、以下の通りである。

	家族(親戚)等と話し合われた件数	家族(親戚)等と話し合わなかった件数
平均	10.01 件	2.86 件

死亡前の話し合い状況の平均は、「家族(親戚)等と話し合われた件数」が 10.01 件、「家族(親戚)等と話し合わなかった件数」が 2.86 件となっている。

(9) 家族と連絡がとれなかったケース

家族等と連絡がとれなかったケースは、「ある」が 1.1%、「ない」が 96.8%となっている。また、「ある」場合の件数の平均は、3.00 件となっている。

(10) 成年後見人制度等を利用したケース

成年後見人制度等を利用していたケースは、「ある」が 11.6%、「ない」が 85.2%となっている。また、「ある」場合の件数の平均は、1.27 件となっている。

(11) 通夜や葬儀を施設が行なったケース

通夜や葬儀を施設が行なったケースは、「ある」が 9.0%、「ない」が 88.4%となっている。また、「ある」場合の件数の平均は、5.76 件となっている。

(12) 終末ケアの考え方

終末ケアの考え方は、「施設の基本的な考え方として家族の意向を尊重する。」が 68.3%と最も多く、次いで「当施設では、利用者の状態が急変した場合、病院へ入院し、そこで終末を迎えるようにしている」が 18.5%、「当施設は基本的には施設内での看

取りを行っている。」が 9.0%となっている。

(13) 共同墓地等の所持

共同墓地等の所持は、「ある」が 11.1%、「ない」が 84.7%、「その他」が 2.1%となっており、「現在検討中」、「今後検討する」と回答した施設はなかった。

(14) まとめ

以上の研究結果より、先の筆者の研究と比較すると、特別養護老人ホームにおける終末ケアの実践は確実に高まってきていることが伺われる。その理由は 3 点ある。

第一の理由は、筆者の施設における聞き取り等から、介護報酬の加算があげられる。これは、2009 年から在宅又は施設における看取りの加算が行なわれたことも、理由の 1 つとしてあげられる。

第 2 の理由は、社会福祉基礎構造改革の流れを受け、利用者の人権、サービスの質の向上、利用者の権利擁護の部分が施設内に浸透し、終末ケア体制に家族の意向も終末ケアマネジメントに反映されていると考えられる。

第 3 の理由は、過去の筆者の調査と比較して、施設利用者の長期入所により配偶者及び家族・近隣の方がいなくなってきたこと、新たな社会福祉サービスである、成年後見制度の利用がみられる点である。さらに、施設が家族にかわり、通夜や葬儀を行っているケースが平均で 5.76 件あり、今後こうしたケースがますます増えることが考えられる。しかし、これらの制度は、基本的に当事者の死亡により支援が終了する為、その後、施設利用者の私物の処理などが課題として残される。近年、晩婚化、非婚化傾向、単身者増加傾向に伴い、超高齢化社会の、自助、共助、公助、互助の具体的取り組みが課題である。これらの課題については、地域包括ケアシステムのなかで再構築が必要である。

(15) 今後の課題と展望

筆者は、2015 年以降も本研究は継続する予定である。今後は調査対象を更に広げ、日本全体の終末ケアの課題について論究する予定である。

<引用文献>

(1) 佐々木隆志著『日本における終末研究の探究 国際比較の視点から -』中法法規出版、1997 年 2 月、p1 ~ p210。<平成 8 年度科学研究費補助金研究成果公開促進費助成、課題番号 82036>

(2) Takashi Sasaki An Investigation Study of End stage Care in Japan 1999 年 2 月、p1 p213。<平成 10 年度科学研究費補助金研究成果公開促進費助成、課題番号:1010008>

(3) 佐々木隆志著『日本における終末マネジ

メント研究』中法法規出版、2009年2月、p1 p204。<平成20年度科学研究費補助金研究成果公開促進費助成、課題番号205136>

(4) 佐々木隆志著、Study of End-stage Care Management in Japan、2014年、中央法規出版、p1 p237。
<平成25年度科学研究費補助金研究成果公開促進費助成、課題番号255161>

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

・佐々木隆志、佐野治、高木剛、介護保険居宅サービスにおける介護職員確保に関する社会学的考察、静岡県立大学、US ホールム2014、静岡県立大学、査読無、p76、2014年9月。

・佐々木隆志、佐野治、高木剛、介護老人福祉施設における介護職員確保に関する社会学的分析、静岡県立大学、US ホールム2013、静岡県立大学、査読無、p207、2013年9月。

・佐々木隆志、佐野治、高木剛、静岡県における介護職・求人と求職の社会学的考、静岡県立大学、US ホールム2012、静岡県立大学、査読無、p120、2012年9月。

・佐々木隆志、エンド・オブ・ライフケアの概念構成と変遷に関する研究、静岡県立大学短期大学部研究紀要、第26号、査読無、p22-34、2012年。

・佐々木隆志、高齢者の終末ケアに関する先行研究の考察、静岡県立大学短期大学部研究紀要、第26号W版、査読無、p1-5、2012年。

[学会発表](計0件)

[図書](計7件)

工房 GEN 著、佐々木隆志監修、誠文堂新光社、季節のリハビリクラフト、2015年、3月、p1 p126。

佐々木隆志著、中央法規出版、Study of End-stage Care Management in Japan、2014年、2月 1p~237p、<平成25年度科学研究費補助金研究成果公開促進費助成、学術図書：課題番号255161>

丹羽兌子著、佐々木隆志監修、誠文堂新光社、リハビリおりがみ、2014年、10月 p1 p126。

大和田猛編、株式会社みらい、高齢者への支援と介護保険制度、2014年2月、p1 p262。

(佐々木隆志、p213 p225)。

杉本敏夫、橋本有理子編、保育出版社、学びを追究する高齢者福祉、2013年、2月、pp1~194 (佐々木隆志、pp235~238)

高間満編、久美出版、第2版 高齢者福祉論、2012年、4月
(共著：佐々木隆志、pp194~203、pp194~203)

相澤譲二、杉本敏夫編、久美出版、相談援助の基盤と専門職、2012年、4月。
(共著：佐々木隆志、pp194~203、pp194~203)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 隆志 (SASAKI Takashi)
研究者番号：23530804

(2) 研究分担者

なし

<謝辞>

本研究を進めるにあたり、静岡県特別養護老人ホーム、ひだまりの郷、レジデンス花、さやの家、他・など多くの施設にアドバイスを頂きました。ここに深く感謝申し上げます。

また、アンケート結果については、希望された施設に7月より順次お送りいたします。ありがとうございました。